



題字：第56代 高麗大記

令和2年2月23日 発行：高麗神社々務所



第一回「高麗澄雄記念 渡来文化大賞」授賞式（令和元年5月23日）
選考委員会（委員長、鈴木靖民・國學院大學名誉教授）による選考の結果、大賞に加藤謙吉氏（右）の『日本古代の豪族と渡来人』、奨励賞に金宇大氏（左）の『金工から読む古代朝鮮と倭』が選ばれ、高麗神社参集殿において大野松茂理事長から授与されました。

日本高麗浪漫学会の活動



会長 須田 勉

高麗浪漫学会は、平成二五年九月に、「一般社団法人高麗一三〇〇」の學術部門を担当する学会として誕生しました。高麗郡建郡は、古代国家が編纂した『続日本紀』に記載され、内容解明の必要性は、早くから、先代宮司である高麗澄雄先生により着目されるところでありました。そうした先代宮司のご遺志は、確実に高麗文康宮司に受け継がれ、現宮司の肝いりで創設されたのが高麗浪漫学会です。

学会のおもな活動は、大きく二つが定められました。一つは、高麗郡建郡に関する研究の推進と講演会を中心とする活動です。日高アリーナを会場としたシンポジウムでは、他県からの参加者も多く毎回五〇〇名を超える盛況ぶりです。改めて渡来文化や高麗神社の由来などに対する関心の高さを知ることになりました。いま一つは、渡来文化を広く市民の方々に「理解をいただくために、『早わかり 高麗郡入門 Q&A』『高麗郡歴史ミニガイド』などの出版を行い、配布した部数は二万部を超えました。

建郡一三〇一年からは、さらに活動範囲を広げるため、高麗郡研究をベースとし、日本の渡来文化全般について考えることに目標を定めました。過去三年間の講演会や研究成果を総括した『古代高麗郡の建郡と東アジア』を高志書院から刊行し、また、渡来文化研究の一層の活性化をはかるため、新たに「高麗澄雄記念 渡来文化大賞」が創設されました。これは、優れた渡来文化研究に対して贈る賞で、早くから、渡来文化が果たした役割の重要性を説いてこられた高麗澄雄先生の思想を、少しでも具現化する道の一つとして設立されたものです。そんなことから、当学会の名称も「日本高麗浪漫学会」と改めました。当学会の会則第二条には、「よりよい地域社会の構築に寄与する」とあります。今後とも、高句麗国王族の象徴である高麗神社や高麗神社氏子会の皆様方と手を携えながら、目標を叶えてまいりたいと考えております。

氏子会 活動紹介

氏神社は、自らが居住する地域の氏神様をお祀りする神社であり、この神社の鎮座する周辺の一定地域に居住する人々を氏子と言います。高麗神社の氏子区域は、大宮・高岡・新井・栗原南部・栗原北部・楡木・本所野口・稲荷道・藤川であり、その中から現在約二〇〇数戸が会に属し、例祭や獅子舞奉納を始め年間に行われる様々な行事への参加や運営をしながら、伝統文化護持の一端を担っています。

《青壮年部OB会》

氏子会には、青壮年部・青壮年部OB会・婦人部の三つの部会があります。OB会は青壮年部を卒業した男性で構成しています。主な活動には、一月初詣駐車場整理、五月若光祭（子ども神輿）の運営、六月そば作り会や八月民謡踊りのやぐら立て等準備と慰労のバーベキュー会・十一月ひもかわ作り会などの懇親行事を行っています。長きに渡り高麗神社と地域に関わってきた者も多くおりますので、氏子の活動経験や社会で培ってきた知恵などを、交流を深めながら若い世代に伝えていく役目も担っています。

宴の行事も多いですが、美味しいお酒や食べ物を楽しみながら、仲間との懇親や神社職員さん達との交流を行い、神社活動の潤滑油のような働きができればと考えております。



上・ひもかわとお酒を前に話はずむ
右・ひもかわの麺は名人岡沢さんの手作り



皆で元気にわっしょい、わっしょい



神輿を担ぐ事を神様に奉告



神輿の担ぎ棒を組んで準備中



神輿の後は、稲の苗を植えてみよう



睦会の先導で手締めを体験



神輿は神社の外も回ります

若光祭 (じやこうまつ)

予定・例年五月中旬頃の日曜日 午前中

主幹・青壮年部OB会

内容・子ども神輿 渡御 お田植祭

協力・青壮年部・婦人部・熊野神社総代・稲野辺神社総代・睦会・消防第二分団

高麗神社・熊野神社・稲野辺神社 三社合同子ども神輿・御神田行事

今から一八年前、当時は子どもを対象とした行事が無かった。その為、将来神祭りを荷なう人材を育成する為にも子供の行事が必要だと考えていた時、「睦会」（神輿の会）の一員で当社の崇敬者でもある石井新一氏から、子ども用の神輿を奉納していただける事となった。これを機に神輿行事が企画され、青壮年部OB会を中心に、兼務社の熊野神社・稲野辺神社氏子も加えて、子ども神輿が始まった。楽しく日本文化を体験してもらおうと、様々な工夫をこらした。時には皆で「おにぎり」を作って供えた事もあった。平成一九年からは、チャリティバザールとの同時開催とし、平成二七年には「若光祭」と名称を改めた。昨年は初めて、「御神田行事」と称し、プラントーでの田植え体験を行った所、子供達は目を輝かせて稲を植えていた。尚、この稲は順調に生育し、十月には田植えをした子供達と共に収穫しご神前にお供えした。これからも多くの子供達に継続して参加いただけるよう努めたい。 神社担当・保々

境内さんさく

「釈迢空歌碑」

境内中央、樹齢三〇〇年の彼岸桜下に歌碑が建立されている。折口信夫が訪れたのは、昭和二五年四月一四日であった。当時、折口が担当していたNHKラジオ「宗教の時間」で高麗神社が紹介される事となり、当社境内で収録が行われたのである。当社では、氏子に協力を求め獅子舞を披露した。その時に詠まれた歌が下記のものだ。「やまかげに しし笛おこるししぶえは 高麗のむかしをおもえとぞひびく 釈迢空（しやくちようくう・は折口の歌号である）」勇壮な獅子の舞ぶりに反して、篠笛から聞こえる音色は、美しくも切なく響く。その響きに折口は高麗人達の亡国の哀しみを感じとったのだろう。歌碑の建立は、昭和四十年代末頃と推測される。歌の石版が埋め込まれた石は、元々境内の客殿南側に置かれていた物で、よく子ども達が遊んでいたという。歌碑を建立した先代宮司 高麗澄雄の妻 敏江によると、澄雄は折口を当社に案内する道すがら、あまりの緊張に足を崩すことはおろか、電車の背もたれに寄りかかることもできなかったと言う。折口を心酔する澄雄にとつて、二十年余りの歳月を経た歌碑の建立には、格別な思いがあっただろう。獅子舞と共にぜひご鑑賞いただきたい。



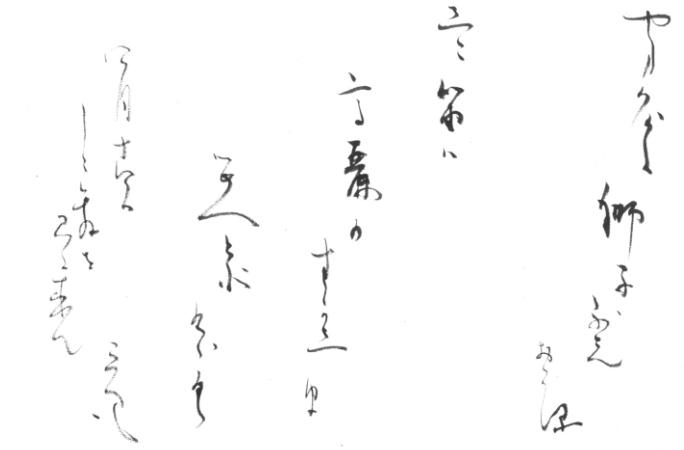
場所：ヒガンザクラ下
釈迢空 歌碑



昭和五一年 浩宮徳仁親王殿下ご来社の折、釈迢空歌碑をご見学される。右端は、ご案内役の高麗澄雄



高麗神社の獅子舞は江戸時代より氏子により受継がれてきた。現在、奉納の機会は年に二回十月の例祭と四月の桜祭。左写真は、桜祭の様子



高麗神社 社殿前での1枚
右手写真：中央 スーツ姿の方が折口信夫 / 左から2番目が澄雄
左手写真：芳名帳に残る参拝の年月日とご芳名

すいき歴史散歩

一〇〇年前の高麗神社

―社殿の変遷―



写真1 高麗神社 旧社殿（大正5年頃撮影）



写真2 八幡神社 拝殿（日高市中鹿山鎮座）

高麗神社の本殿は、戦国時代の天文二一年（一五五二）に建立されたと伝えられています。現在の覆屋・幣殿・内拝殿は昭和時代のもので、江戸時代から大正時代までの間に損傷の程度に応じて修理と再建が繰り返されました。

昭和一〇年（一九三五）からは、大規模な境内整備が行われました。建築家で

おりぐちしのぶ
折口信夫（明治二十年〜昭和二八年）
大阪府出身、國學院大學国文科卒。大阪府立今宮中学の教員を経て、大正八年から國學院大學講師、大正十年（九月）から同教授。大正一二年から慶応義塾大学講師兼任、昭和三年に同教授となった。昭和七年、雑誌「土俗と伝説」を発行し国文学研究への民俗学導入という独自の学問を形成。「折口学」と称されており、柳田國男の高弟として民俗学の基礎を築いた。歌人、詩人としても活躍した。

ある伊東忠太（いとうちゆうた）の基本設計に基づき、それまで山を背に東面していた社殿を、新たに基壇を設けて、南東に向ける配置に一新しました。本殿だけは曳家で移動し、その他の建物を新築しました。

境内整備前の高麗神社の様子がうかがえる場所が日高市中鹿山にあります。同所に鎮座する八幡神社（写真2）の拝殿は、昭和一〇年代に高麗神社から移築されました。もともとは、明治二五年（一八九二）に建築された高麗神社の拝殿で、およそ一〇〇年前の古写真（写真1）に見えるものです。

この拝殿は切妻造・棧瓦葺きで、蔀戸・縁・高欄など、一〇〇年前の様子がよくわかります。

八幡神社は、周囲に住宅が密集しており、高麗神社とは環境が異なります。しかし、一〇〇年以上前の建物が現存し、当時の雰囲気を感じられる貴重な場所です。



【高麗家59代目 高麗澄雄が案内役を務めて先導】



【上：神門階下での手水/下：神門内庭上で修祓（お祓い）】



【参道狛犬付近でお迎える高麗家の人々 左手の少年が筆者】



【参拝を終えられ社務所へと向かう 神門にて】



【江戸時代に使われていた獅子頭をご見学】



【宝物「鍍銀鳩榊彫文長覆輪太刀」をご見学】



【高麗家住宅の外観をご見学 ここでの説明は県の文化財担当者】



【解体調査再建前の国重文 高麗家住】



【住宅内部をご見学】

昭和五一年（1976）筆者は小学四年生であった。この頃、当社が賑わうのは、正月、例祭、七五三といった特別な日に限られていた。父（先代宮司澄雄）は日ごと社務所の表の間で座卓に頬杖を突き、煙草をくゆらせながら何やら思案をしていた。そんな当社に浩宮徳仁親王殿下（当時）の御成りを告げる連絡が入った。「侍従はな、電話でもごきげんようって言うんだ」父は冗談交じりに話したが、お迎えの準備は大変であった。当時の人手は、祖父と両親の他に若い神主が一人。総出で境内を整えたという。御見学予定の高麗家住宅は昭和四六年重要文化財に指定され、この年十月から解体調査再建の計画であった。浩宮殿下の御成りは解体直前の十月二日で、父にとって正に晴天の霹靂であった。

一方筆者は、皆の苦労など露ほども知らず十月二日の当日を迎えていた。着なれないブレザーをつけ、姉たちと参道狛犬付近に並ぶと、浩宮殿下が御着きになられた。御到着前に「殿下がお通りになったら、ちゃんとお辞儀をしようね」と母から言われたように思う。物々しい雰囲気の中、殿下はほほえみを湛えながら参道を進み、我々の近くをお通りの際には、高麗家の者たちにもお応え下さった。以来、その凛とした御姿は、幼い筆者の心に深く刻まれることとなった。殿下は、神門前階下で御手水を御取りになり、神門内庭上で修祓を御受けになった後、殿内に御参入、御玉串を奉り御拝礼あらせられた。その後、社務所奥の間にて、当社所蔵の「武蔵国高麗氏系図」「国指定重要文化財大般若波羅密多経四五六帖」「鍍銀鳩榊彫文長覆輪太刀」などを御覧になり、宮司から御説明を受けた。続いて社務所を出ると、釈迦空歌碑を御覧になり高麗家住宅に向かった。殿下は住宅の土間に入ると膝を折って床下を御除きになりながら「ここは少し傾いていますね」とおっしゃられたという。山を背負った高麗家住宅の地面は、東に向けてわずかに傾斜をしていた。幼少期、古道に御興味を持たれ、後に水運史の御研究に打ち込まれる殿下は、高等科学徒であったこの頃既に地勢に関する鋭い感性をお持ちだったのだろう。御持参のカメラを手に境内を熱心に御見学された後、徒歩でご移動になり高麗山聖天院勝楽寺を御参拝になった。

遠い過去の記憶を辿りながら、改めて令和の御代を見つめると、英邁な若きプリンスのその後の御苦勞が思われてならない。平穩な世の中を生き、成熟に向う社会にあって御位に登ることは、その御姿も完成されたものを求められてしまうだろう。

上皇陛下の御讓位は、天皇陛下御即位の奉祝氣運醸成を後押しした。国民には大きな恵みと言って良い。そうであれば国民もまた、天皇陛下をお支えする「氣構え」が必要だと筆者は思う。

祝編纂一三〇〇年

「日本書紀について」

現存する日本最古の書物と言え、古事記と日本書紀です。中でも日本書紀は、養老四年（720）に完成してから、今年で一三〇〇年の節目を迎えます。これら古典は、たんに古い歴史書であるというだけでなく、そこに記された神話や伝説・歴代天皇の事績など、古代人の心情を今に伝える日本文化の源泉が記された、貴重な資料でもあります。今回は編纂一三〇〇年を迎えた日本書紀へのいざないとして、その概要と魅力をご紹介します。

日本書紀は、全三十巻（本来は別に系図一卷が存在していたと伝わる）の名著であり、文体は漢文で書かれ、古事記よりも一世紀近く長い、神代から第四代持統天皇までの事績が記録されています。編纂を命じたのは古事記と同じ天武天皇で、日本初の正史編纂事業として、舎人親王らがまとめました。和銅五年（712）に完成した古事記とは性格は異なりますが、両書は言うなれば兄弟のような関係です。一貫した物語として、日本語で読むことが可能な古事記に対して、日本書紀は漢文で記され、神代にあっては「一書に曰く」として、他の言い伝えも収録していま

す。これは広く東北アジアにも流布するよう意識して作られたものと考えられます。当時、国の正式な歴史書を有する事は一等国の証とされました。このため日本書紀は遣唐使によって中国にも伝えられ、日本の国風を伝えたのであろうと思われれます。

さて、日本書紀は高麗神社にとっても重要なつながりがあります。それは御祭神高麗王若光の渡来にまつわる記録が載せられていることです。第十三卷天智天皇五年（666）十月に高句麗からの使節団の副使として「二位玄武若光」の名が記されております。一説によると当時、危機的状況にあった高句麗が、日本に支援を求めて来たのではないかと云われています。その二年後に、高句麗は滅亡してしましますが、続いて編纂された書物「続日本紀」には、若光様が大和朝廷に仕え「王」の姓を賜った事が記されています。日本書紀は、若光様の実在を証することの出来る、貴重な史料でもあるのです。

日本各地には、日本書紀に関連した場所が数多く存在します。高麗神社とのつながりは、その一例にすぎません。日本書紀をもっと身近に味わう為に、日本各地の神社や史跡に関心をもってください。特に神社の由緒書に記された内容の中には、日本書紀の記録の一部が引用されることがよくあります。そんなふうに古代の情景を思い浮かべて見ることが、日本書紀を味わうということになるはずですよ。

◆月次祭にご参列ください

※毎月十五日 午前八時より（祭典時間約二十分）

高麗神社では、毎月一日と十五日の朝、神様への感謝と世の中の平穏を祈る月次祭を執り行っています。中でも十五日の祭典には、一般の方々も参列することができます。神主さんと一緒に月次祭でお祓いの祝詞を読みましょう。

※朝七時五十分までに参集殿二階 祈願受付にお越しください。参列：無料

◆月次祭の後は、茶話会にもご参加ください

月次祭 祭典終了後は、神主による講話や月によっては境内清掃を行います。講話内容は神社や日本の文化など月毎に変わります。日頃聞けない神主さんの話や朝の凜とした空気の中での清掃奉仕で、清々しい気持ちを取り戻しましょう。お時間の都合がつかない場合は、月次祭祭典の参列のみでも結構です。

祈願のご案内 随時受付

※予約の必要はありません。

毎日 午前八時三十分～午後五時まで（十二月三十一日は、午後二時まで）

初宮詣・七五三・ランドセルのお祓い（三月上旬～四月上旬）

人生儀礼各種・商売繁昌・厄除け・方位除け・車お祓い

高麗神社々務所 埼玉県日高市新堀八三三

お問い合わせ 電話 〇四二一九八九一四〇三



編集後記

担当・保々

文章を綴ることが、大の苦手であります。ましてや冊子の編集作業を行うなど思ってもいませんでした。何とか皆様の力添えをいただき、第三号を作り終える事ができました。感謝申し上げます。

さりながら、全てが苦というわけではありません。何事にもどこか楽しみを見つめるのが編者の得意技でもあります。私は、編集や取材など行う中で、新たな発見をする事が楽しみです。左の写真は正に今号編集最大の見聞でした。これは平成二九年行幸啓のもので、似た構図が⑥頁にあります。浩宮殿下のお側に立つ先代の表情にも緊張が…。先代からも当時の話、お聞きしたかったなあ。



天皇后両陛下 国重文 高麗家住宅をご見学側で控える 60代目当主 学芸員が説明を担当